

不況と戦争の時代（1931～1945）その3

《1931年羽田飛行場開港、1939年ニッポン号世界一周飛行》

1931年（昭和6）、初めての民間専用空港として官営の羽田飛行場が正式に開港します。同年、アメリカ人2人が、世界一周飛行の一環で、初めて太平洋無着陸横断飛行に成功しています。（注1）

1933年（昭和8）、立川飛行場から民間空港部門が羽田に移転し、大阪、福岡、タイペイ、ソウルといった当時の国内主要都市はもちろん、大連、タイ、ベトナムといった外国へ運航を拡大していき、東京国際飛行場と呼ばれることになりました。

毎日新聞社（大阪毎日、東京日日）が、国産飛行機による世界一周記録の樹立を目指します。（注2）飛行機は、帝国海軍の陸上攻撃機を長距離連絡運輸機に改造したものでした。「ニッポン号」と名付けられました。（注3）

1939年（昭和14）8月26日、東京国際飛行場を飛び立ち、北アメリカ大陸→南アメリカ大陸→アフリカ北部→ヨーロッパ→インド→東南アジアと回って、55日後の10月20日に、東京国際飛行場に帰還します。その総飛行距離は、5万2886kmであり、所要日数、総飛行距離とも、世界一周飛行の世界記録を樹立します。

北アメリカを飛行中の9月1日、ドイツがポーランドに侵攻し、イギリスとフランスが3日に宣戦します。第2次世界大戦が勃発したのです。9月9日には、ニューヨークに着き、大歓迎を受けています。それは、真珠湾攻撃の2年前のことでした。

注1：最初の世界一周飛行は、1924年（大正14）、アメリカ人によってなされます。このとき、アラスカから霞ヶ浦に来て上海に飛んでいます。経過日数175日、飛行総距離4万6560kmでした。1931年（昭和6）は、アメリカのハーンドン、クライド・パングボーンが、ニューヨーク→ロンドン→ベルリン→モスクワ→ハバロフスク→東京→青森県津代海岸→ウェナチー（アメリカ）→ニューヨークと飛行します。初めての太平洋無着陸横断飛行でした。これは、リンドバーグによる大西洋無着陸横断飛行に遅れること、4年目でした。

注2：この毎日新聞社の企画は、2年前の1937年（昭和12）に朝日新聞が飛行機「神風号」を使って東京ーロンドン間を世界的記録となる飛行時間で成し遂げたことに触発されたものです。「神風号」は、陸軍初の国産偵察機を改造したもので、4月6日に立川飛行場を飛び立ち、10日にロンドンに到着。経過時間は約96時間で、世界的な大記録でした。昔の新聞社は、こうした夢と冒険がある企画を新聞記事と連動させ、購読者数を増やしたのですね。

注3：飛行機は、三菱重工が開発試作した九六式戦闘機です。この戦闘機試作後、ゼロ戦を開発することとなり、払い下げられたものです。九六式戦闘機もゼロ戦も、三菱重工の堀越二郎による設計であり、中京において試作機が造り上げられました。ゼロ戦のエンジンは、中島飛行機製作所が開発したものを搭載。三菱重工と中島飛行機がゼロ戦を生産しましたが、実機の6割は、中島飛行機が製造。戦後中島飛行機製作所が解体されると、その技術・ノウハウは、日産自動車、富士重工などに引き継がれ、大企業に成長しています。

写真、①世界一周飛行（探検.com「ニッポン号5万キロの飛行記録」掲載資料に細見加筆）、②東京日日新聞の懸賞告知（blog「The Current of the Times」掲載資料）、③シカゴ空港でのニッポン号（blog「The Current of the Times」掲載写真）、④羽田に帰国したニッポン号（探検.com「ニッポン号5万キロの飛行記録」掲載写真）

③



④

